

和訳先渡し授業の実践とその教育的効果

藤村和道*

The Practice of *Wayaku-sakiwatashi* instruction and its educational outcome

Kazumichi FUJIMURA*

This article addresses the author's first year teaching practice at Tsuyama National College of Technology and how the initial difficulties experienced were solved. This process led to the practice of *Wayaku-sakiwatashi* instruction which aimed at increasing the amount of time for students to engage in a variety of tasks requiring them to intake comprehended input. The tasks which students attempted, including chunk reading, are discussed in detail along with student feedback through conducting a questionnaire.

Key Words : *wayaku-sakiwatashi*, intake, comprehended input, chunk reading

1. はじめに

本論文は、2008年度津山高専1年目の授業実践（英語Ⅲ；3年生全4学科を担当）に基づいた、新しい英語教育法を提案するものである。英語Ⅲは、リーディングを中心とし、リスニング・ライティング能力を高めることを目標とする授業である。表1は、学生による授業評価アンケートの結果である。いかに授業に集中させられるか、それだけを考えて筆者が自主作成したワークシート教材を中心に、前期授業の反省から後期の「和訳先渡し授業」の実践に至るまでの過程を記述しながら、本稿を進めることにする。

2. 前期授業

2.1 3つの誤算

最初から授業が上手く進んだわけではなく、前期はむしろ、失敗の連続であった。失敗の原因は、1) 100分授業の壁、2) 予習への期待、3) 居眠り学生への対応、の3点に要約できる。まずこの3点について簡単にまとめ、前期授業の概要を説明する。

2.1.1 100分授業の壁

これは、筆者自身の問題である。県立高校などの非常勤講師を経験してきた中で慣れていて50分授業での授業構成とはまったく異質なものであったため、100分という時間を有効に使えず、非常に流れの悪

い授業を展開してしまった。

表1. 2008年度英語Ⅲの学生評価アンケート結果

授業科目【講義のみ】
(全質問の平均点: 本人に関する質問を除く)
情報工学科 平均4.64(第3位)
電気電子工学科 平均4.50(第6位)
【教育内容の水準と量に関する質問】
情報工学科 平均4.52(第4位)
【理解を助ける工夫に関する質問】
情報工学科 平均4.68(第2位)
電気電子工学科 平均4.59(第7位)
【勉強意欲を増進する工夫に関する質問】
情報工学科 平均4.68(第1位)
電気電子工学科 平均4.59(第6位)
【総合評価】
情報工学科 平均4.77(第4位)

2.1.2 予習への期待

予習をしてくる学生としてこない学生の格差が予想以上に激しく、期待が裏切られた。新出単語の意味、本文訳を、ノートに詳しく予習してくる学生がいれば、教科書もなにも用意せずに授業に出席するものもいた。学習意欲格差に対応できないまま前期が過ぎた。

2.1.3 居眠り学生への対応

英語学習に対しての動機づけが弱いからであろうか、授業時間が進むにつれ、居眠り学生が増えていった。筆者の授業にも原因があったかもしれないが、何度起こしても状況は変わらなかった。大学入試などのために英語が必要という状況ではないため、外発的に動機づけられていない。また、英語に苦手意

識を持つ学生が多く、内発的動機づけも低い、と考えられる。

2.2 前期授業の概要

図1は、前期授業で使用したワークシートの一部である。基本的な授業手順を簡単に記述していく。【VOCABULARY】では、新出単語の確認をした。学生には、予習で英単語の意味と品詞を調べるよう指示した。同意語・派生語の指導や発音練習もおこなった。

【KEY SENTENCES】では、本文の内容確認をおこなった。一文ずつ英語を日本語に訳していく訳読式は極力避けたい教授法であった。本文理解において重要と思われる文、今後の英語学習において重要になってくるであろう文法事項を含む英文に限り、訳を確認した。

【GRAMMAR】では、先の【KEY SENTENCES】で注目した重要な文法事項の定着を図るため、文法説明や英作文活動などをおこなった。最後に、授業の締めくくりとして、内容確認のプリントを配布した。

これが前期授業の基本的な流れである。前章で述べたように、【VOCABULARY】の段階からいきな

りつまづくことになってしまった。そして、【KEY SENTENCES】では、英語嫌いの学生は、一文が長くなると日本語訳を考えるとどこか、英文を読んで構造をつかむことも放棄する傾向にあった。そして、【GRAMMAR】の時点になると3分の1以上の学生が居眠りをしている状況であった。

3. 後期授業

3.1 後期授業改革のポイント

授業にいかに関心させられるか、それだけを実現させるべく新しい授業の進め方を模索した。金谷(2002)は英語授業改善の処方箋として、英文に触れる時間と量を増やす、という提案を行っている¹⁾。とりわけ、授業で使用するワークシートにさらなる改良を加える必要性を強く感じていた。授業ワークシートに書き込むという作業は、比較的多くの学生にとって上手く機能していたように思われたからである。授業内で意味のある活動をさらに増やすこと、これがひとつめのポイントであった。

加えて、日本語訳の取り扱い方の問題があった。各クラスでテスト範囲の和訳が欲しいとの声かなりの数にのぼったことを受け、テスト前にまとめて配布していたが、なにか釈然としないものを感じていた。日本語訳をただ配布するだけではなく、それを有効に利用する学習形態を考案すること、これがふたつめのポイントである。

このような考えの下、たどり着いたのが「和訳先渡し授業」の実践である。使用した授業ワークシートは、日英対照方式(Bilingual Format)とチャンク読み(Chunk Reading)の2点が理論的基盤となっている。以下、それぞれの特徴と授業の進め方を記述していく。

3.2 和訳先渡し授業

これは金谷他(2004)で詳しく紹介されている授業形態で、訳読式授業一辺倒の高校英語教育を変えるべく登場した²⁾。この方法の誕生経緯が次のように簡単にまとめられている。

- 1) 高校英語では量が大切である。量を定着させることが肝心である。
- 2) 理解(導入)と定着両方ともに大切だ。
- 3) 限られた授業ではしかし、両方をこなすことが困難。
- 4) そのためにはどちらかを端折る必要がある。
- 5) 和訳先渡しでは、理解(導入)部分を端折ることにした。
- 6) 浮いた時間で定着を図るさまざまな活動をするのが「和訳先渡し」の目的である。

(p.26)

著者達は「和訳」の是非を問うのではなく、あく

図1. 前期授業ワークシート

Confusion between languages			
【VOCABULARY】			
ENGLISH	JAPANESE	ENGLISH	JAPANESE
confusion		amaze	
couple		disappoint	
counter		bill	
immediately			
【KEY SENTENCES】			
1) They had studied Japanese in Canada before starting on their trip.			
2) When they finished eating, the husband tried to use Japanese and asked,			
3) Beautiful ikura-zushi was immediately placed in front of the amazed Canadians.			
【GRAMMAR】			
1) had + p.p. <過去完了: 一つの過去よりも以前の過去について述べる>			
2) finish + ~ ing / try to ~			
①不定詞でも動名詞でも意味は変わらない:			
②不定詞しかとらない:			
③動名詞しかとらない:			
④どちらもとるが意味が変わる:			

までも、和訳を渡して内容理解の時間を短縮させ、その浮いた時間で英語をどれだけ定着させられるか、そこにこの授業の目的がある、と繰り返し強調している。「和訳先渡し授業はタスクで決まる」(p.66)との指摘を受け、慎重にタスク活動を考えた。ここでは、毎回の授業の柱となった2種類のタスク（語彙力と読解力をつけることを目的とした）について述べていく。

3.2.1 日英対照方式 (Bilingual Format)

英和辞書を使用して読解を行うより、バイリンガル・フォーマット（以下BF）を用いた方が、内容理解、語彙の定着に良い影響を及ぼす、という研究（静 哲人関西大学教授）をヒントにした。金谷他（2004）にもこの研究は紹介されている³⁾。図2は、後期授業で使用したワークシートの一部である。学生は、日本語訳と英文を対比させながら【VOCABULARY】にある日本語に対応する英単語を探して書き入れていく。同時に、内容理解の確認タスク (True or False タスク) を課すこともある。ここでは、新出単語以外にも、重要と思われる単語は必ず取り入れることにした。語彙力不足は英語学習において致命的だからである。

図2. Bilingual Format ワークシート

The Oldest Refrigerator

ENGLISH	JAPANESE
① What did prehistoric humans do to keep food for future use? Modern scientists know that they dried vegetables and berries in the sun and buried grains in the ground. But how was meat stored by prehistoric people?	①先史時代の人間は後で使うための食料を保存するためにどんなことをしたのでしょうか。現代の科学者たちは、彼らが野菜やベリー類を日干しにしたり、穀類を地中に埋めていたことが分かっています。しかし、肉は先史時代の人々によってどのように保存されたのでしょうか。

【 VOCABULARY 】

先史時代の	1)	埋める	4)
現代の	2)	穀物	5)
乾かす	3)	保存する	6)

このワークシートを自主作成し使い始めてから、学生に明らかな変化が2つみられた。ひとつは、比較的英語力の低い学生でもゲーム感覚で活動に積極的に取り組みはじめ、授業中に多く質問をするようになったこと、そしてもうひとつは、比較的英語力の高い学生も、授業時間内に必然的に英文を読まなければならないため、内容理解だけでなく、英文構

造の理解にまで意識が向くようになったことである。静 (1999) では、このBFの利点と、使用するに際の注意事項を以下のように述べている⁴⁾。

使い方さえ誤らなければ、対訳を与えることは、最も効率的に大量の **comprehensible input** を与え、辞書を引く苦痛なく語彙を増やす有効な方法のひとつである。使い方を誤らなければ、という意味は、生徒に、日本語訳を参考にして英文自体の構造や表現方法を学ぶことが目的だということを理解させた上でならば、という意味である。(p.98)

学生の中には、日本語訳だけで内容を理解し、授業を終えようとするものもいるかもしれない。ここで強調されている「日本語訳を参考にして英文自体の構造や表現方法を学ぶこと」の視点が抜け落ちてしまう可能性がある。そこで、BF方式で内容理解と語彙の確認を終わらせた後、英文の構造を理解させること、そして最も重要な、英文を英語の語順通りに読んで理解するチャンク読み (Chunk Reading) を取り入れることにした。

3.2.2 チャンク読み (Chunk Reading)

英語を英語の語順で、頭から意味を理解していくことを目指す読み方。チャンク（意味のかたまり）に区切って読んでいくことで、速読力をつけることと、日本語とは異なる英文の構造を理解することを目的とした活動である。図3は、Chunk Reading ワークシートの一部である。図2のBFワークシート英文に対応している。学生は、あらかじめチャンクに分けられている英文をその意味のかたまりごとに訳し、右の欄に書き入れていく。

図3. Chunk Reading ワークシート

【CHUNK READING】		
	ENGLISH	JAPANESE
1)	a What did prehistoric humans do	
	b to keep food for future use?	
2)	a Modern scientists know <u>that</u>	現代の科学者はつぎのことを知っています
	b they dried vegetables and berries in the sun	
	c <u>and</u> buried grains in the ground.	
3)	a But how was meat stored	
	b by prehistoric people?	先史時代の人々によって

【VOCABULARY】以後の授業手順を説明していく。学生は【CHUNK READING】にて、日本語訳を書いていく過程でチャンキング (chunking) していく。例えば、1a) は「先史時代の人々は何をしたか」、1b) は「あとで使う食物を保存するために」というように処理させる (と同時に不定詞の目的用法も指導する)。目安として、いくらかの意味のかたまりには、訳をあらかじめ書き入れておく。独力で処理できそうなかたまりのみチャンキングしていても良い、と指示することもある。門田・野呂 (2001) は、情報処理の単位としてチャンキングを次のように説明している⁵⁾。

言語も含めて、一般に人の情報処理過程には、符号化 (coding)、貯蔵 (storage)、検索 (retrieval) の3過程が含まれていると考えられている。その中で、符号化は、入力情報を人が処理可能な内部形式に変換することであり、ある一定の操作単位でなされることが知られている。これを情報処理単位 (processing units) の形成とかチャンキング (chunking)、あるいはフレーズ化 (phrasing) と呼ぶ。(p. 99)

この時、バイリンガル・フォーマット (BF) にある和訳から極力離れて、意味のかたまりごとの日本語訳を作っていくよう指示する。訳読式のように、長い英文を後ろから日本語の語順に合わせて訳し上げていくクセを直し、読解速度を速めることがねらいである。

リーディングの2つの方法を比較している、表2を見て欲しい。白畑他 (2009) では、日本人の読みの特徴として、戻り読み (Return reading) という読み方が指摘されている⁶⁾。これは、英文を後ろから読んで意味を取っていく方法である。戻り読みの原因は日本語と英語の統語構造の違いに起因している。確かに、正確な日本語で訳出しようとするれば、英語と日本語では語順が逆であるがゆえ、そのような読み方になってしまう。しかし、それでも英文の処理速度は遅くなってしまう。英語を英語の語順で理解していくには、チャンク (意味のかたまり) ごとに分けていく読み方、いわゆる直読直解 (Direct reading) できる力が前提になってくる。このチャンクの認識がないと、読解速度は上がらない。意味のかたまりを意識せず、かつ、日本語の語順を頭に置いたまま英文を理解しようとすると、英語の受容能力は伸びない。英語の語順の理解と語彙力、この2つが身につくことによって、初めて文法知識が活きてくるのである。

授業手順に話を戻す。英→日の流れにある程度慣れてきてからは、チャンキングをより明確に理解させるためのタスクを用意した。それは、あるパラグラフの英文を学生自身がチャンクに区切っていくも

表2. リーディングの方法

方法	読み方	例文
Return reading	英文を前から順に読むのではなく、後ろから戻って読むこと	This is a book which I bought yesterday. →これは私が昨日買った(ところの)本です。
Direct reading	英語の母語話者が処理している順番に従って、 <u>前から読んで意味を取る</u> (直読直解)	This is a book which I bought yesterday. →これは本ですが、それを私は昨日買いました。

のである。訳を参照しながらチャンク分けしていく場合もあれば、参照せずにチャンクに区切ってから、それぞれの日本語訳を考えさせることもある。そして定期試験でも、チャンクを意識させる問題作成を心がけた。例えば、並べ替え問題は常に、授業でチャンクに区切った英文を題材とし、提示したチャンクを1つの単位としている。岡本 (2002) は、ある技能に熟達した上級者の研究を通して「意味を見つける能力が高まると、一チャンクに入る記憶事象の量が格段に多くなる」(p. 75) ことを見出し、上級者はチャンク容量が大きいと結論づけている⁷⁾。このことから、意味のかたまりをより広く、大きな単位で処理することができれば、速読力は飛躍的に向上するはずである。

また、静 (2004) は「授業で扱った事項、活動 (ティーチング・ポイント) と、テストで出題する事項、タスク (テストティング・ポイント) とは可能な限り一致していなければならない」(p.34) という内容的妥当性を指摘している⁸⁾。BF方式で探し出した語彙も必ず試験で再び問うことにした。形式は同じだが、もちろん、和訳は試験問題には印刷していない。

その活動自体もスムーズに進み、一定の効果を上げたBF方式は、導入当初から学生に人気が高かったが、一方で【CHUNK READING】は、不慣れな形式 (英文の縦置き) にとまどい、産出される訳が日本語としては少し違和感があることから、一部の学生に不人気であった。しかしながら「英語を読むことの意味は完璧な日本語訳を完成させることではない。直読直解を目的とするべきなので、ここでの日本語は英語を英語の語順で理解するための道具的なものである」と説明し、ある程度回数を重ね、慣れてもらうしかなかった。

『認知言語学キーワード事典』では、チャンキングという認知過程を「ひと連なりの情報の羅列をいくつかの塊に分けることにより、記憶に留めやすくする」(p. 153) 記憶管理の方法であると説明してい

る⁹⁾。不満を持っていた学生たちも、しばらく授業を重ねてチャンクの区切りが分かってくると、意味理解がすばやくできたり、教科書本文の単語やフレーズの暗記が容易になったり、という実体験を伴って、チャンキングの効果に気づき始めてくれたようであった。

4. 考 察

4.1 アンケートに見る学生の反応

それでは、後期の実践に対する学生の反応について、アンケートの解答をもとに考察していきたい。授業形態をガラリと変えてしまったことで、学生に少しばかり迷惑をかけてしまっているかもしれないと思い、後期の新たな授業実践について、1) 学生の反応を知ること、そして、2) こちら側の意図するところを伝えることを目的として、記述式のアンケート調査を数回、実施した。各実践についての代表的なコメントについて考察を加えていく。アンケートの解答文はそのまま掲載してある（強調・下線は筆者による）。

4.1.1 日英対照方式（BF）について

- ① 英文と日本語訳を載せてあるのでわかりやすく、授業内で各章の理解はし易かったです。自分は、英語があまり好きではないのですが、この様式だと取っ付きやすく頭にも残り易いので少しずつでも確実に英語の力が身についたと思います。
- ② このやり方は印象に残りやすいのでいいと思います。
- ③ 本文を考えながら読めるのでいいなあと思います。
- ④ 単語を文中から探すので記憶しやすいかも。
- ⑤ 英文と訳を関連させて見えるので理解しやすい。
- ⑥ I think this one is better the first one. This one is easy to understand and make me easy to compare the word in Japanese and English.
- ⑦ I search the vocabulary by myself based on the given passage. From that, automatically I can remember the words and understand what the passage is about.

①は、英語を苦手とする学生によくみられたコメントである。和訳がすぐに確認できることで、心理的にいくらか楽になり、意欲がわくのではないだろうか。この「取っ付きやすさ」が、苦手意識を持つ学生には必要条件なのかもしれない。

②～⑤は、いずれも、語彙の定着度合いについて述べている。これらのコメントには、門田・池村(2006)に詳しく紹介されている、クレイクとロックハートによる『処理水準の深さ』(depth of processing)が関係していると考えられる¹⁰⁾。つまり、

認知的により深く処理されれば、記憶に残る可能性がより高くなるということである。また、語彙を定着させるには、繰り返しが必須である。英英辞典の定義を使ったタスクや、語彙の周辺情報（同意語・反意語・派生語・コロケーションなど）の指導をおこない、新出語彙に触れる回数が増えるよう試みたことも効果があったように思われる。

⑥、⑦はともに留学生のコメントである。留学生にとっては、日本語の勉強にも有効であったようである。

4.1.2 チャンク読みについて

- ⑧ チャンクリーディングのやり方がすごく役に立った。今までは長い文だと考える気も起きなかったけど、この方法のほうの方がわかりやすいし、やりやすかった。
- ⑨ チャンクの問題(?)を解いていた前よりも英文を読むのが早くなった気がします。
- ⑩ 今までない方法だったり、よくプリントの形式もかわったりしてちょっととまどう部分もあったけど、前から訳していったり(←チャンクのやつ)、英語がスムーズに読めるようになった気がします。
- ⑪ 面白くて便利と思った。
- ⑫ 最後からと違って言葉を組み立てていくから簡単。
- ⑬ 「だいたいの意味はこんなかな」というごまかしがきかないので難しい。
- ⑭ CHUNKにわけて訳すことで、意味や構成が理解しやすかった。
- ⑮ チャンクリーディングがメンドクサイ。
- ⑯ 頭使うから疲れる。

⑧のようなコメントから判断すると、英語嫌いの学習者は英文が長くなると、それだけで戦意喪失してしまうようである。【CHUNK READING】では、まずは自分自身で処理できそうなチャンクだけ処理していけばよい、と指示を出した。①同様、取り組みやすさが学生の意欲を生み出す原因であることが分かる。

⑨～⑭のように、多くの学生がチャンクをしっかりと意識でき、直読直解の方法を身につけたように思われる。少数ではあったが、以前からこのような読み方をしていた、という学生もいた。Nation (2001)によると、チャンキングの効用は読解の処理速度のスピード化だけにとどまらず、情報の発信にも寄与するのだと理解できる¹¹⁾（強調・下線は筆者による）。

The main advantage of chunking is reduced processing time. That is, speed. Instead of having to give close attention to each part, the chunk is seen as a unit; this represents a saving in the time needed to

recognize or **produce the item**. (p.320)

チャンクを取り入れた実践的指導を提案している、田中・佐藤・阿部(2006)においても、英語を話すとき、文を単位にするのではなく、チャンクでつなげていくことを推奨している¹²⁾。英語の4技能のいずれにおいても、チャンクを意識して利用できる応用力を身につけて欲しい。

⑮、⑯のようなコメントは、タスク活動に真剣に、自ら考えながら取り組んだ証拠という意味で、好感の持てる、肯定的なコメントであると理解している。

4.1.3 授業ワークシートについて

- ⑰ どのプリントでも要点は必ずおさえてもらっていたので、勉強のやり方がバラバラにも関わらず復習もやりやすかった。むしろ色々だったことで新鮮味があっただけよかった。レベルが低いとよく言われる高専だからついていけるのかもしれないが、どの方法が良かったというより年間通してきた内容が良かったと思う。
- ⑱ プリントを使ったら大切なところを書き込めるようになっていて、そういうのが分かりやすく、整理されているので後から見直しやすいです。
- ⑲ 今までのよりもやりやすかった。しかも分かりやすい。
- ⑳ I like this style of worksheet. It is **useful for me to study English**.

⑰～⑳のコメントは、授業での活動全般について言及している。授業ワークシートが勉学意欲を増進させる一助となったことは、大変嬉しい。なぜなら、毎授業の用意に多大な時間と労力をかけてきたからである。

和訳先渡し授業の成否は、和訳配布後のタスク活動にあることは、すでに述べた。ワークシートには、バイリンガル・フォーマット(BF)方式やチャンク読みを柱として、様々なタスクを散りばめたが、そのタスクの内容、選択、配列は、授業で扱う英文のトピック、文法事項、語彙項目などが毎回異なるので、必然的に編纂していくことが必要であった。大変であった。しかし、ひとつ基本の型ができると、あとは、学生の反応に応じて部分修正を施すことで、スムーズに授業を進めることができた。

教師の指南書とでも言うべき齋藤(2007)は、教師の仕事の中で、オリジナルなプリント作りの大切さ、つまり、編纂能力の重要性を指摘している¹³⁾。また、教育社会学者の荻谷剛彦は、一教育者としての立場から、考える力を育てる教育に必要な視点について、「学ぶ側の頭のはたらかせ方に、教師がどれだけの想像力を持って働きかけることができるか」(大村他, 2003, p.209)であると述べ、同時にその難しさも指摘している¹⁴⁾。学生が直接書き込む授業ワークシートが、一定の評価を得たことは素直

に嬉しいことである。さらに取り組みやすく、力がつくワークシート(教材)を開発していきたい。

5. おわりに

5.1 まとめ

本論では、筆者の津山高専1年目の授業実践を報告し、理論的考察を加えた。前期での失敗を糧に、後期では大胆に授業改革を行い、チャンクをキーワードにして、大多数の学生が苦手意識を持つ英語と格闘させた。独自のアンケートや、授業評価アンケートの結果から判断すると、1年目の挑戦は好意的に受け入れられたように思う。なにより嬉しいのは、後期では居眠りをする学生が激減したことである。積極的に参加する価値のある授業だと判断してくれたことが、嬉しい。

学生を動機づけたものが何なのかは、具体的には分からないというのが正直なところである。授業ワークシートの使用か、チャンク指導か、はたまた、筆者の個性が受け入れられたからなのか。そのどれもが正しい可能性もある。しかし、4学科160人を超える学生を相手に動機づけの正体を特定することはほぼ不可能であろう。ひとつだけ言えることは、どの活動においても、事前にその意義を学生に説明し、自分の英語学習体験談を伝え、身につけて欲しい技能について、なるべく具体的に詳細な情報を与えることを常に心がけたということだ。時には第二言語習得研究(SLA)から、学生の関心を引くような研究結果を紹介したこともあった。また、前期から引き続き、居眠り学生には、机間巡視の際、常に声をかけてまわった。ある日突然何かが変わったという兆しは見られなかった。むしろ、学生の雰囲気、徐々に意欲的な学習集団のそれに変わっていった感がある。英語教育における動機づけ研究の第一人者であるドルニュイ(2001)の指摘は驚くほどの確である¹⁵⁾。

とりわけ教室環境では、ひらめきや天の啓示のように生徒の考え方を瞬間的に変えてしまうような、動機づけを高める劇的な出来事に出会うことはまれである。概して微妙な差異の連続こそが、結果的に永続的な効果につながる可能性を秘めているのである。(米山朝二／関 昭典訳, 2005, p.26)

5.2 今後の課題

今年度(平成21年)の英語Ⅲでは、授業方針として「英語を読む目的は、日本語訳を作成することではなく、そこから使える英語表現を身につけることである」と、初回の授業ガイダンスで学生に伝え、リーディングからライティングへとつなげていく指導をおこなっている。竹内(2003)は、成功した英

語学習者の学習方略の研究を通して「ライティング」については、まず読むことの重要性を指摘する成功者が多い。(中略)書くことに言及しているにもかかわらず、読むことに触れている場合が多いのが成功者の一つの特徴であった」(p.158)と述べ、ライティング力を伸ばす理想的な学習法として以下のようまとめている¹⁶⁾。

(1) リーディングを通じて対象外国語に「大量に触れ」て、そこから(2)「有用と思われる表現」を見つけ出して覚える。そして、覚えたものを(3)「積極的に使用」し、(4)使用の適切性を確認するため書く力のある母語話者などに「添削(修正)して」もらう、という流れが見いだせる。(p.205)

これに従えば、リーディング授業における教師の主な役目は、「有用と思われる表現」を教科書本文から選択し、他の文脈に置き換えての英作文課題、または、英文再生問題として定期試験に出題するなどして、学生に覚えさせること、そして、エッセイなどを通して「積極的に使用」させ、「添削(修正)して」フィードバックすること、が考えられる。大切なことは、これらすべてが学習者の大量のリーディング活動から派生するものでなければならない、ということである。

繰り返しになるが、言語には、受容と発表の2つの側面があり、4つの技能(リスニング・リーディング/スピーキング・ライティング)から成り立っている。これらは密接に関連しあっているが、そのなかでも、リーディングにおける読解力が他の3技能の基礎になっている。多読とライティング力には強い関係があると報告する研究は多い¹⁷⁾(津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ、2002)。

情報(文字)の受け取り方を間違えず、読むことを通して大量の言語データに触れることが必要となってくる。処理単位としてのチャンクの意識を高め、速読力育成の徹底、さらに重要なこととして、英語を話す・書く場合にも、自分の産出する英語をチャンク単位で意識しながら発信できるよう指導してい

くことが、今後の課題である。

謝 辞

ご多忙にも関わらず、筆者の度重なる相談のために貴重な時間を割いて、助言を与えてくださった、中岡尚美教授、古樋直己准教授、エリック・ランボー准教授、久保川晴美講師の各氏に感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) 金谷 憲(2002)『英語授業のための処方箋』大修館書店、p.22
- 2), 3) 金谷 憲他(2004)『和訳先渡し授業の試み』三省堂
- 4) 静 哲人(1999)『英語授業の特技・小技』研究社
- 5) 門田修平・野呂忠司(2001)『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版
- 6) 白畑知彦他(2009)『改訂版 英語教育用語辞典』大修館書店、p.188
- 7) 岡本浩一(2002)『上達の法則 効率の良い努力を科学する』PHP新書
- 8) 静 哲人(2004)『英語テスト作成の達人マニュアル』大修館書店
- 9) 辻 幸夫編(2004)『認知言語学キーワード事典』研究社
- 10) 門田修平・池村大一郎(2006)『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店、p.95
- 11) Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 12) 田中茂範・佐藤芳明・阿部 一(2006)『英語感覚が身につく実践的指導』大修館書店、p.246
- 13) 齋藤 孝(2007)『教育力』岩波新書、p.196
- 14) 大村はま他(2003)『教えることの復権』ちくま新書
- 15) ゴルタン・ドルニエイ著 米山朝二／関 昭典訳(2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店
- 16) 竹内 理(2003)『より良い外国語学習法を求めて』松柏社
- 17) 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編(2002)『英文読解のプロセスと指導』大修館書店、p.281

